

か否かを検証するためにも、プラトンはもう一度、厳密にまた虚心に読み直されるべきであろう。

平成12年

◎11月22日

ペルシア帝国時代のユダヤ人
—エジプト出土アラム語文書より—

佐藤 進

離散（ディアスポラ）が歴史的にくりかえし問われてきたのはユダヤ人の場合である。離散ユダヤ人は前586年のバビロニア大捕囚以前から現れており、エジプト出土アラム語文書に証されるエレファンティネのユダヤ人軍事植民地がその初期の例としてもっともよく知られている。しかし、離散が決定的な意味をもつのは大捕囚以後のことであり、王国滅亡によるユダヤ民族存立の危機がユダヤ教成立をうながした。

マックス・ウェーバーの説明によれば、王国時代には外国人にたいする政治的遮断はあったが、宗教的遮断はもともと存在していなかった。捕囚時代にエルサレムを唯一の合法的聖所とみなし、儀礼的に不浄なものを排除する宗派的運動が起こり、ペルシア帝国の出現とキュロスのユダヤ人解放、とりわけダレイオス1世の民族的祭司階級との同盟政策がヤハウエ共同体の儀礼的遮断を推進させる役割を果たし、ネヘミヤとエズラの改革がユダヤ教＝パーリア民族の成立を達成させた。

エレファンティネ出土アラム語文書は、ちょうどこの時期、前5世紀のユダヤ教成立前後におけるエジプト在住の離散ユダヤ人の社会と宗教生活について具体的な情報を提供してくれる。この文書はすでに1890年代から知られているが、その後の追加と研究をあわせて、最近のB. Porten & A. Yardeni, *Textbook of Aramaic Documents from Egypt*, 1～4, The Hebrew University,

1986～99に発表されている。

そのなかに、ミブタヒヤ文書と呼ばれる一群の契約文書がある。ミブタヒヤはエレファンティネのユダヤ人守備隊兵士マフセヤの娘であり、父と同じ部隊のユダヤ人兵士と結婚したが、おそらく夫の死により、エジプト人建築士エスホルと再婚している。彼女はまた、あるエジプト人との訴訟においてエジプトの女神名により誓約している。ここではまだユダヤ人社会における儀礼的遮断が徹底されていない。

エレファンティネには、入植後のエジプト王時代にYHW神殿が建設され、祭司がユダヤ人共同体を統轄していた。前5世紀後半の祭司イエダニヤにかかわる10通の書簡がのこされており、そこからエルサレムと離散ユダヤ人社会との関係をうかがうことができる。前419年には過越と除酵祭の順守がエレファンティネに通達され、儀礼主義の強化が要請されている。注目されるのは、前410年にYHW神殿がエジプト神官たちによって破壊され、イエダニヤ以下祭司一同が神殿再建を訴願したさいのエルサレム側の対応である。本国の高級祭司、貴族への働きかけはすべて無視され、最後にユダヤ総督への上訴において承認の回答がえられたが、もっとも重要な儀式である全燔祭の執行は許可されなかった。エルサレムにおいて確立された儀礼的遮断は離散ユダヤ人社会にも実行がもとめられ、おそらくそれが現地住民との宗教的対立を激化させてYHW神殿の破壊をもたらしたこと、また、神殿再建にさいしてエルサレムを唯一の合法的聖所とみなすユダヤ教祭司の反対とともに、離散ユダヤ人の現状を配慮したユダヤ総督による政治的決定があったことを推察させる。

なお、ユダヤ教成立の問題意識を離れて、ユダヤ人とペルシア帝国との関係を考えて、ペルシア帝国支配における諸特徴、大王の超越的支配と宮廷の国際的性格、民族（国民）国家と帝国の論点などが問われることになるであろう。